

たまのよこやま

特集

「発掘された近世都市

”江戸”
“の誕生”

地域展示「発掘された近世都市“江戸”の誕生」

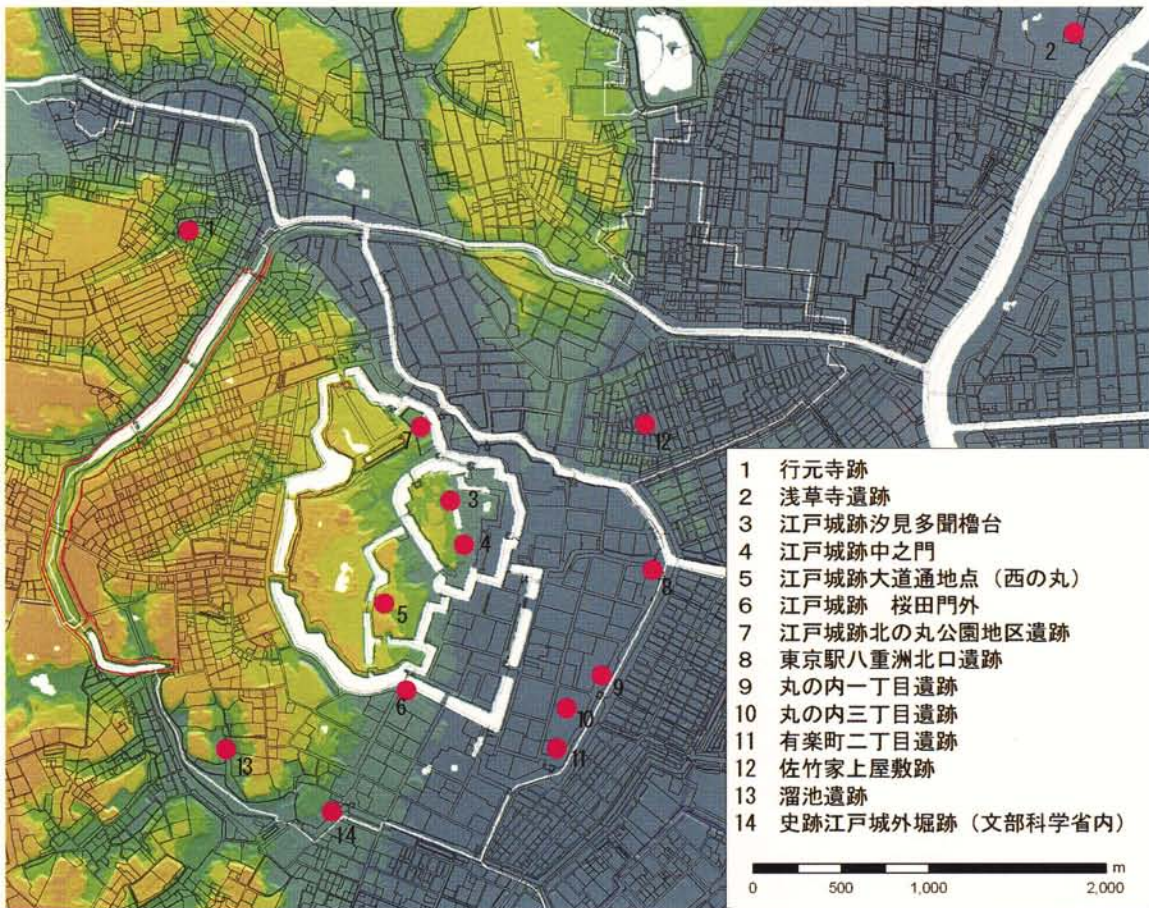
《はじめに》

「発掘された日本列島 2008」展(文化庁主催)が平成 20 年 7 月 19 日～8 月 31 日の期間で、江戸東京博物館で開催されます。同時に江戸東京博物館主催のもと、当センターと千代田区教育委員会で共催事業を行うことになり、「発掘された近世都市“江戸”の誕生」と題し、地域展示を企画しました。

近世都市江戸は、天正 18 (1590) 年の徳川家康入国を契機として江戸城築城がはじまり、慶長 8 (1603) 年の江戸開幕とともに本格的な城と城下町の建設が行われました。寛永 13 (1636) 年の江戸城外堀完成の頃になると、名実ともに天下一の大都市となります。

明暦 3 (1657) 年の大火によって、江戸は灰燼かいじんに帰すほどの被害を受けますが、その後も大都市としての拡大は続きます。

今回の地域展示では、江戸城築城期の遺跡を通して、城と大名屋敷の整備過程にスポットを当てます。時代は、関ヶ原の戦いや大坂の陣などの戦乱を経て平和の世へと移り変わり、各地で近世城下町が成立していきます。こうした歴史の胎動のなか、今までの史料では不明瞭であった、近世最大の都市江戸の誕生について、江戸城跡や江戸城外堀跡、千代田区丸の内地域で近年行われた発掘調査を通して垣間見たいと思います。



《表紙絵図》「寛永江戸全図」(複製・原史料：大分県臼杵市教育委員会蔵)

本資料は、寛永末年(1642～43年)の江戸近郊を含めた江戸城下の絵図で、道路、武家地、堀割・河川、屋敷拝領者など都市構造に関する情報が充実した高精度の図面です。

従来、江戸時代初期の絵図は、精細さに欠け、江戸全体を描いた詳細図の起源は、「正保江戸図」(1644年もしくは1649年)とされていました。本資料の発見によって、この絵図は江戸城下全体を把握できる、最も古い資料となりました。

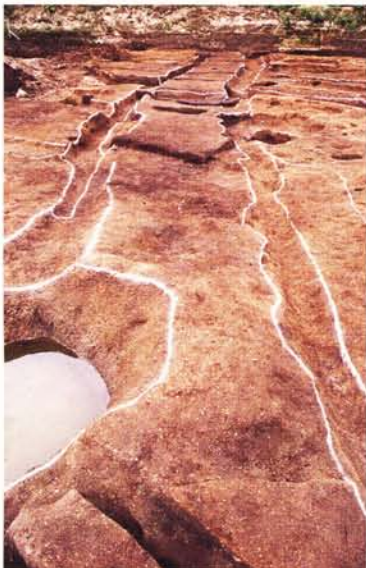


中世の遺跡分布と交通網

I. 近世都市成立の前夜

家康入国当時の江戸の街は、江戸城直下には入江が入り込み、葦の生い茂る湿地帯が広がり、城下を建設することが難しい地形でした。しかし、江戸は広大な関東平野の中心にあたり、江戸湊と河川交通によって関東一円を支配するためには格好の立地環境を備え、品川湊や浅草とともに中世の江戸は、「東武の一都会」と呼ばれ、海洋と河川水運を繋ぐ重要な結節点でした。

江戸城北の丸に位置する東京国立近代美術館遺跡



II. 江戸城築城

天正18年(1590)に徳川家康が江戸入国した当時の江戸城は、後北条家の一支城に過ぎなかったのですが、慶長8年(1603)に将軍に就任し江戸幕府を開くと、翌年諸大名に江戸城築城の天下普請を号令し、慶長11年から翌年にかけて本丸・二の丸・三の丸や外郭の一部、同15年から19年にかけて西丸の修築が行われ、慶長末年には江戸城内郭の基礎が築られました。

左：中世の道路跡（一ツ橋二丁目遺跡）
 右：北の丸の造成に伴う厚い盛土（江戸城北の丸公園地区遺跡）



上空からみた江戸城跡

では、江戸氏やおおたどうかん、後北条家時代の江戸城(館)の存在を示す堀や墓跡が発見されました。特に道灌時代に関する15世紀後半の出土遺物には、茶道具や武具などがあり、このような遺構や遺物は中世城郭の特徴を示しています。また近年都心部では、千代田区一ツ橋二丁目遺跡や豊島区染井遺跡の道路跡、新宿区行元寺跡や台東区浅草寺遺跡の寺院跡など中世遺跡が発見され、近世江戸城下町構築以前の道路網や城下の様子が明らかとなっています。

その後、寛永13年(1636)には延長約14kmにおよぶ外堀を築いて江戸城下の武家地や町地を囲む惣構が構築され、江戸城は完成しました。その築造は、113家の諸大名を動員し、西国大名には低地の石垣による堀を、東国大名には台地の土手による堀を築かせるなどの役割分担がなされ、石高に応じて国持大名を組頭に置いて丁場割されたところに特徴があります。

丸の内一丁目遺跡では、石垣土台に刻印や杭などで各大名の工事区域が記され、各区域には大名を記した符号が石垣表面に付されていました。右上の写真は、杭を境として矢筈紋を刻んだ豊後佐伯藩毛利(森)家、「○に山」を刻んだ備中成羽藩山崎家の丁場境が確認されています。江戸城惣構は、戦国期から近世にかけて培われた軍事的都市の完成を意味しますが、江戸城西方地域も郭内に取り込み、不足する大名邸地を確保するための役割もありました。



上：江戸城外堀石垣 下：外堀から出土した大名の名を記した荷札と人形（ともに丸の内一丁目遺跡）

III. 城下町の建設

本格的な江戸城築城に先立ち、天下の府として城下町を整えるため、慶長8年(1603)に諸大名に命じて町割りの障害となる日比谷入江を埋め立てて丸の内や日本橋といった城下町の中心となる江戸城東方の開発が着手され、同時に舟入や堀割など交通網の整備も行われました。この開発によって丸の内には、熊本藩細川家や高知藩山内家、鳥取藩池田家など有力な外様大名や幕政を支えた譜代大名の上屋敷が置かれ、慶長10年(1605)頃から本格的な屋敷整備が始まったといわれています。

江戸前島の一面に位置する東京駅八重洲北口遺跡では、1590年代の堀に囲まれた屋敷と墓を埋めて1610年頃に屋敷区画を大きく変えて大名屋敷となり、上水道といったインフラ整備もいち早く行われていました。

江戸城や丸の内での発掘調査によると、大規模な土木事業を伴いながら城下町が徐々に整備される様子が確認されました。まさに1610年から1630年代におよぶ築城期の江戸は、都市の建設に携わる人々で溢れかえっていたことでしょう。



江戸初期の上水（東京駅八重洲北口遺跡）



陶器 向付 (東京駅八重洲北口遺跡)



金箔瓦

左：出羽秋田藩佐竹家上屋敷、右：溜池遺跡・陸奥二本松藩丹羽家上屋敷

IV. 江戸の拡大—明暦の大火—

明暦3年(1657)1月、本郷・小石川・麴町を火元とする明暦大火は、おりからの北西風で南東方向へ延焼し、江戸城や城下に甚大な被害を及ぼしました。城内では、本丸はじめ幕府の象徴であった五重の天守閣も灰燼に帰し、城下では、武家地・寺社地・町人地の区別なく家康の入国以来営々として築かれた天下一の城下町の約6割が焼失しました。その死者、10万人を超える大惨事となりました。幕府は復興に際して、天守の造営を断念し、武家地に関しては御三家をはじめ城郭内の大名屋敷を郭外へ

移転させ、さらに被災時のために下屋敷の所持を奨励しました。また、延焼防止対策として広小路や火除地などを要所に設置するなど、この災害を契機に江戸城下の防火の観点を組み込んだ復興計画が行われました。

江戸城本丸や北の丸での発掘調査では、明暦大火で被災した瓦や陶磁器、被災人骨が出土し、江戸城にも甚大な被害を及ぼしたことが確認されています。

(*後藤宏樹・斉藤 進)

*後藤宏樹：千代田区立四番町歴史民俗資料館



江戸城跡 (北の丸公園地区)：明暦大火焼土層に覆われた人骨



1. 古墳時代後期の大型竖穴住居
(上部中央にカマド、4本柱穴、
下部中央に大型の貯蔵穴、そ
のすぐ上に入口施設に関連す
るビット)



2. 弥生時代の竖穴住居



3. 古墳時代の竖穴住居



4. 奈良時代の竖穴住居

中田遺跡は浅川の支流である川口川左岸の微高地上に立地しています。すでに、昭和41年から翌年にかけて、都営八王子中野町団地建設に先立つ発掘調査が実施され、古墳時代後期の集落を始め、貴重な調査成果が得られた学史的にも有名な遺跡です。昭和45年3月に八王子市の史跡に指定されています。

今回の発掘調査は、遺跡の西端6,400㎡を対象に行いました。発掘区域からは、様々な遺構が検出されましたが、中心となるのは縄文時代から平安時代の竖穴住居です。縄文時代は16軒、弥生時代後期から古墳時代初頭が3軒、古墳時代が16軒、奈良時代が2軒、平安時代が1軒の合計38軒の竖穴住居を調査しました。竖穴住居の移り変わりを実感できる発掘調査となりました。今回はこの内、弥生時代以降の竖穴住居について紹介します。

弥生時代の竖穴住居は、コーナー一部が丸みを帯びた平面形態を呈しています(写真2)。炉を有し、4本の支柱穴や貯蔵穴が検出されました。規模は一辺が4～6

mを測り、3軒とも覆土に焼土や炭化材が多量に検出されたことから、火災に遭った可能性が考えられます。

古墳時代になると、平面プランが方形になり、カマドが敷設されてきます(写真1・3)。そして、床面積が60㎡を超える大型の竖穴住居も造られていました。カマドは北壁に粘土を用いて構築されており、中には土師器で補強したカマドも発見されました。支柱穴は4本を基調としますが、6本柱穴のものも存在し、いろんなタイプの貯蔵穴も検出されています。大型の竖穴住居には、南側に張り出した大きな方形の貯蔵穴が設けられていました(写真1)。

奈良・平安時代の竖穴住居は、規模が縮小する傾向が見られます。備え付けのカマドはありますが、柱穴や貯蔵穴は検出されませんでした(写真4)。

今後、昭和41・42年の調査成果と併せて、中田遺跡のムラ(集落)の全体像や竖穴住居の構造と変遷を少しでも解明できればと考えています。(小坂井・鶴間)

くろがね物語 十四

古代牧と焼印

焼印の用途で最も重要視されるのは、家畜への使用です。公私を問わず、家畜の管理や所有の目印としたもので、地域史を考える上では重要な資料です。

古代において、牛馬を飼養する場所は「牧」と呼ばれ、とくに関東地方には「御牧」という政府直轄の牧が多くおられました。令の規定では、公的な牧の場合、牛馬の焼印に「官」の字を使用するとされていますが、まだ実物は見当たりません。古代の焼印はこれまでに20例以上発見されていますが、なぜか関東甲信越地方に限られています。これは、おそらく御牧の設置と密接に関わる現象と思われる。

それでは、牧の実態とはどのようなものだったのでしょうか。多摩(摩)郡内には3箇所の御牧がおかれていますが、その一つ、「由比牧(まさ)」が八王子周辺に想定されています。湯殿川流域の時田遺跡では、鍛冶工房跡から「∩」形の焼印や砥石などが検出され、9世紀後半頃のものとして推定されます。遺跡の近くには低い段丘面が拡がり、馬の放牧や飼養に適した立地条件を備えています。近年、群馬県安中市や渋川市で見つかった牧関連の遺跡からも、馬具などを修理する工房跡が確認され



時田遺跡1号工房跡と出土焼印(『八王子市時田遺跡』1995より)

ていることから、放牧地の周囲にはこうした生産施設が点在していた可能性があります。時田遺跡も、そうした牧関連施設の一部であったと推定されます。

多摩丘陵には、鉄製馬具や焼印を出土する古代村落がいくつかみられますが、これらは『牧』の存在を物語る有力な考古資料といえるでしょう。(松崎)

保存科学室 だより

千代田区和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡は、平成

18年度に参議院の新議員会館整備等に伴って調査が行われた遺跡です。既に報告書も刊行され、現在、木製品・金属製品の保存処理を行っています。今回は、この中から少し変わった将棋の駒を御紹介しましょう。

見つかった駒は、高さ3.4cm、幅2.1cmで、厚さ2mmに満たない薄い板で作られています。下端が雑に切断されていることから、札もしくは曲げ物等の板を再利用した手製の可能性も考えられるでしょう。高級アルコール含浸で保存処理した結果、墨で書かれた文字が肉眼でも判読できました(写真)。



表

表 赤外線画像

裏

そこに記された文字は、表が「酔象」、裏に「太子」。私たちが普段親しんでいる将棋にはない駒です。これは、中将棋・小将棋などの古い形式の将棋に用いられたもので、太子に成ると、王将が取られても勝負が続いたそうです。

元禄時代の書物『諸象戯図式』によれば、酔象は室町時代に後奈良天皇の勅により除かれたとされ、これ以降、現在の将棋が普及したとの考えもありますが、戦国時代末に織田信長に攻め滅ぼされた福井県一乗谷の朝倉氏居館からも出土しており、近世初頭までは酔象を含む将棋が残っていたことが確かめられています。

今回の資料は、伴っていた陶磁器から1720年代(享保年間)前後に捨てられた可能性が高く、さらに新しい時期の出土例として注目されます。他の駒が出土していないことから、どのような将棋に用いられたかは分かりませんが、将棋の歴史を考える上で貴重な資料であることは確かでしょう。(長佐古)

参考文献

増川宏一 1977 『ものと人間の文化史 23- I 将棋 I』

発掘された日本列島 2008・地域（東京）展示 開催！！



発掘された重要な遺跡・遺物の最新情報



開催期間・場所
7月19日(土)～8月31日(日)
江戸東京博物館
常設展示室5階第2企画展示室前

地域（東京）展ミュージアムトーク

地域展示コーナーの解説をします

講師

斉藤 進・大八木 謙司
(東京都埋蔵文化財センター)
後藤 宏樹
(千代田区立四番町歴史民俗資料館)



夏休み親子企画

親子縄文アクセサリ作り教室

参加申込み受付中！！
お申込みはお早めに！

文化財講演会・講座のご案内

文化財講演会

- 第3回 9月20日(土)
「縄文人は不平等？」 中村 大氏
- 第4回 1月21日(水)
「縄文人の利き手は？」 阿部 朝衛氏
- 第5回 2月21日(土)
「縄文人の四季」 小葉 一夫

文化財講座／TAMA 市民大学講座

東京都埋蔵文化財センター・多摩市教育委員会共同事業

- 第1回 11月4日(火)
「多摩に暮らした旧石器の狩人たち」 伊藤 健
- 第2回 11月5日(水)
「多摩地域の縄文時代」 中山 真治氏
- 第3回 12月9日(火)
「古墳からみた多磨のなりたち」
6～7世紀を中心として 松崎 元樹
- 第4回 12月10日(水)
「古代南武蔵の役所とムラ」 江口 桂氏

2008年度 広報・普及事業のご案内				(一般は中学生以上)
行事名	対象/人数	日	時	備考
文化財講演会	一般120名	第3回 9/20(土) 第4回 1/21(水) 第5回 2/21(土)	13:30～15:30	当日受付 無料
文化財講座	一般120名	第1回 11/4(火) 第2回 11/5(水) 第3回 12/9(火) 第4回 12/10(水)	13:30～15:30	当日受付 無料
発掘調査発表会	一般120名	3/20(祝)	13:00～16:00	当日受付 無料
縄文土器作り教室	④一般30名	制作 ④10/4・5(土・日) 野焼き ④11/8(土)	制作 9:30～16:00 野焼き 9:30～15:30	往復はがきで申込み ④締切 9/19(金) 参加費 200円
縄文アクセサリ作り教室	⑥⑦ 一般30名 ④⑤⑧⑨ 親子15組	④ 8/23(土)午前 ⑤ 8/23(土)午後 ⑥⑩18(土)午前 ⑦ 1/24(土)午前 ⑧ 3/27(金)午前 ⑨ 3/27(金)午後	午前 9:30～11:30 午後 13:30～15:30	往復はがきで申込み ④⑤締切 8/8(金) ⑥締切 10/3(金) ⑦締切 1/9(金) ⑧⑨締切 3/13(金) 参加費 200円
古代の布作り教室	④一般30名	④12/6(土)午前	午前 9:30～11:30	往復はがきで申込み ④締切 11/21(金) 参加費 200円
貝輪作り教室	一般30名	① 9/27(土)午前 ② 9/27(土)午後	① 9:30～11:30 ② 13:30～15:30	往復はがきで申込み ①②締切 9/12(金) 参加費 200円
考古学実習③ 縄文食体験	一般10名 親子10組	11/1(土)	10:00～13:00	往復はがきで申込み 締切 10/17(金) 参加費 300円
考古学相談室	小学生 中学生 一般	通年(土日は除く)	10:00～16:00	受付随時 無料



たまのよこやま 74

東京都埋蔵文化財センター

2008年7月1日発行

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2

TEL 042-373-5296

http://www.tef.or.jp/maibun/